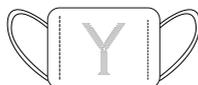


マスクの解析学ノート 04 関数

大盛マスク

2017年5月28日



マスクの資料保管庫

<http://worldinfo.wicurio.com/>

TwitterID : @Uton_YaYuYo

これは未完成稿ですが、中間テストが近いので暫定公開します。

目次

1	関数の極限に入る前のいろいろな定義	3
1.1	合成関数	3
1.2	単調〇〇	3
1.3	有界	3
1.4	逆三角関数	3
1.5	三角関数の逆数	4
2	$\epsilon - \delta$ 論法	4
2.1	$\epsilon - \delta$ 論法定型文	4
2.2	δ^2 の項	5
3	振動が収束しないことの証明	6
4	片側極限	6
5	$\lim_{x \rightarrow x_0} f(x) = +\infty$ の証明	7
6	$\lim_{x \rightarrow -\infty} f(x) = y_0$ の証明	7
7	合成関数の極限定理1.7	7
8	連続	8
8.1	連続の定義	8
9	参考文献	9
10	更新記録	9

1 関数の極限に入る前のいろいろな定義

1.1 合成関数

$$(G \circ F)(x) = G(F(x))$$

1.2 単調〇〇

1.2.1 単調増加

$$x_1 < x_2 \Rightarrow f(x_1) < f(x_2)$$

1.2.2 単調減少

$$x_1 < x_2 \Rightarrow f(x_1) > f(x_2)$$

1.2.3 広義の単調増加

$$x_1 < x_2 \Rightarrow f(x_1) \leq f(x_2)$$

1.2.4 広義の単調減少

$$x_1 < x_2 \Rightarrow f(x_1) \geq f(x_2)$$

1.3 有界

任意な $x \in D$ に対して (つまり、 x が定義域の範囲で動くとき)、 $f(x) \leq M$ なら 上方に有界 $m \leq f(x)$ なら 下方に有界 $m \leq f(x) \leq M$ なら 有界

1.4 逆三角関数

$y = \sin^{-1} x$ のとき $x = \sin y$ で、

定義域が $[-1, 1]$ 、
値域が $[-\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2}]$

$y = \cos^{-1} x$ のとき $x = \cos y$ で、
定義域が $[-1, 1]$ 、
値域が $[0, \pi]$

$y = \tan^{-1} x$ のとき $x = \tan y$ で、
定義域が $[-\infty, +\infty]$ 、
値域が $[-\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2}]$

1.5 三角関数の逆数

$$\operatorname{cosec} x = \operatorname{csc} x = \frac{1}{\sin x} \quad (1)$$

$$\sec x = \frac{1}{\cos x} \quad (2)$$

$$\cot x = \frac{1}{\tan x} \quad (3)$$

2 $\epsilon - \delta$ 論法

2.1 $\epsilon - \delta$ 論法定型文

任意な $\epsilon > 0$ に対して、 $\delta = \boxed{}$ とすれば、

$0 < |x - x_0| < \delta$ ならば、

$$f(x) - y_0 = \boxed{\text{xの式}} < \boxed{\delta\text{の式}} = \epsilon$$

となる。ゆえに、 $f(x) \rightarrow y_0$ ($x \rightarrow x_0$)

2.2 δ^2 の項

$0 < \delta < 1$ とすると、 $\delta^2 < \delta$ を使う。

2.2.1 $x \rightarrow x_0$ のとき、 $x^2 \rightarrow x_0^2$ の証明

例題には

$$\lim_{x \rightarrow x_0} x^2 \rightarrow x_0^2 \quad (4)$$

の証明がある。

定型文に収めるために $|f(x) - y_0|$ を計算するが、

$$|f(x) - y_0| = |x^2 - x_0^2| = |x - x_0||x + x_0|$$

となってしまう、 $0 < |x - x_0| < \delta$ がうまく適応できないことがある。

この時は、無理矢理 $x - x_0$ を創成するとよい。

$$|x - x_0||x + x_0| = |x - x_0||x - x_0 + 2x_0| < \delta|\delta + 2x_0|$$

さらに、 $|\delta + x_0|$ を整理するために、

三角不等式 $|a + b| < |a| + |b|$ を使い、

$$|\delta + 2x_0| < |\delta| + |2x_0| = \delta + 2|x_0|$$

をとすると、 $\delta|\delta + x_0| < \delta^2 + 2\delta|x_0|$ となる。

こうなると δ^2 の項がでて、困ってしまう。よって、 δ^2 を消すために、

$0 < \delta < 1$ とすれば、 $\delta^2 < \delta$ となる。よって、

$$\delta^2 + 2\delta|x_0| < \delta + 2\delta|x_0| < \delta(1 + 2|x_0|) < \epsilon$$

よって、

$$\delta = \frac{\epsilon}{1 + |x_0|} \quad (5)$$

ここまで材料がそろったところで証明をまとめると、
任意な $\epsilon > 0$ に対して、 $\delta = \delta = \frac{\epsilon}{1 + |x_0|}$ とすれば、

$0 < |x - x_0| < \delta$ ならば、

$$|f(x) - y_0|$$

$$= |x^2 - x_0^2|$$

$$= |x - x_0||x + x_0|$$

$$= |x - x_0||x - x_0 + 2x_0|$$

$$< \delta|\delta + 2x_0|$$

$$< \delta^2 + 2\delta|x_0|$$

$$< \delta + 2\delta|x_0|$$

$$< \delta(1 + 2|x_0|) < \epsilon$$

となる。ゆえに、 $f(x) \rightarrow y_0$ ($x \rightarrow x_0$)

3 振動が収束しないことの証明

基本方針は x_0 付近でも変動していることを示せばいい。

4 片側極限

通常の極限では、

$$0 < |x - x_0| < \delta \text{ ならば、 } f(x) - y_0 < \epsilon$$

を証明したが、片側極限では、 $0 < |x - x_0| < \delta$ の絶対値をとっぽらう。

右側極限 (+側極限) なら、

$$0 < x - x_0 < \delta \text{ ならば、 } f(x) - y_0 < \epsilon$$

左側極限 (-側極限) なら、

$$0 < x_0 - x < \delta \text{ ならば、 } f(x) - y_0 < \epsilon$$

$$\ast x_0 - x = -(x - x_0)$$

5 $\lim_{x \rightarrow x_0} f(x) = +\infty$ の証明

任意な正の数Mに対して、正の数 δ を $\delta < \boxed{Mの式}$ となるようにとると、

$$0 < |x - x_0| < \delta \text{ ならば } f(x) > \boxed{\deltaの式} > M$$

したがって、 $f(x) \rightarrow +\infty (x \rightarrow x_0)$

6 $\lim_{x \rightarrow -\infty} f(x) = y_0$ の証明

$x < -M < 0$ のとき、 $|x| > M$ であるから、

$$|f(x) - y_0| = \boxed{xの式} < \boxed{Mの式} < \epsilon$$

任意な $\epsilon > 0$ に対して、 $0 < \frac{1}{\epsilon} < M$ となるようにMをとれば、

$$x < -M < 0 \text{ ならば、 } \left| \frac{1}{x} - 0 \right| < \epsilon$$

よって、 $f(x) \rightarrow y_0$

7 合成関数の極限定理1.7

$\lim_{x \rightarrow x_0} f(x) = a, \lim_{x \rightarrow a} g(x) = b$ の証明

ただし、

$$(1) : \lim_{x \rightarrow x_0} f(x) = a$$

$$(2) : \lim_{x \rightarrow a} g(x) = b$$

$$(3) : g(a) = b$$

式(1)と式(2)から、

$$0 < |x - x_0| < \delta \text{ ならば、 } |f(x) - a| < \epsilon$$

$0 < |y - a| < \delta'$ ならば、 $|g(x) - b| < \epsilon'$

となるが、

$|f(x) - a| < \epsilon$ と $0 < |y - a| < \delta'$ が一致すればOKと考えるのが起
点。

ポイントは、 $y = f(x)$ と考ただけでは、一致しないため、もう二つ工夫
する必要がある。

一つ目の工夫は、 $\epsilon = \delta'$ と置くこと。これで、2式が連動する。

もう一つは、 $g(a) = b$ を使い、

$y = a$ のとき $g(y) = b$

なので、

$|y - a|$ のとき、 $|g(y) - b| = 0 < \epsilon'$

よって、 $0 < |y - a| < \delta'$ の「 $0 <$ 」が取れて、

$|y - a| < \delta'$ ならば、 $|g(x) - b| < \epsilon'$

になる。

これで、 $|f(x) - a| < \epsilon$ と $|y - a| < \delta'$ は同じになったため、教科書のような
証明文が書ける。

8 連続

8.1 連続の定義

$x = a$ で連続とは、

- i $x = a$ とその近辺で定義されてる
- ii $\lim x \rightarrow a f(x)$ が存在する。
- iii $\lim x \rightarrow a f(x) = f(a)$

の三つの条件が成り立つ

条件[iii]があれば[i][ii]は若干重複な感があるが、
解放的には [i]と[ii] はよく使う。

9 参考文献

参考文献

[1] 微分積分学・矢野健太郎・石原繁

10 更新記録

2017年05月28日リリース